

「心を知る神」

～分かり合う信仰!! 愛し合う part2～

Iヨハネ4:7～13

みなさん、「ごんぎつね」という物語をご存知ですか?いつまでも教科書に使われている物語です。あらすじは、昔、山中に「ごんぎつね」といういたずらばかりするキツネが住んでいました。ある日、ごんは川で魚をとっている兵十を見かけ、こっそり魚かごにいる魚を逃がしていました。最後にうなぎを逃がそうとした時、兵十に見つかった、そのうなぎを首に巻きつけたまま逃げました。10日ほどたって、兵十の母親が死んでしまったこと、兵十が一人ぼっちになってしまったことを知ったごんは、兵十の母親はきっと最後にうなぎを食べたかたに違いないと思い、自分のしたいたずらを後悔していました。その後ごんは、一人ぼっちになってしまった兵十に山で採れたクリやきのこをこっそり届け始めました。兵十は誰がくれたのかさっぱり分かりません。いつも届けられるクリやきのこは神様がくれたかと思っていました。そしてごんはいつものようにクリを兵十の元にこっそり届けに来ました。しかしその姿を兵十が見つけたのです。またいたずらをして来たかと思ひ込んだ兵十は火縄銃でごんを撃ってしまいました。ごんを撃ったあと近づいてみるとそこにはクリが置かれていたのです。兵十はビックリして「ごん。お前だったのか。いつもクリをくれたのは…」と言ひ、ごんはぐったりと目ををつむったまま頷いた。兵十は火縄銃をばたりと落とした。青い煙はまだ筒口から細く出ていた。というお話です。私たち人間は、このような生き物ではないでしょうか。過去を元に物事を判断し、人は変われることを知っているが完全に信じることができなくて、相手にチャンスを与えてあげることができず、過去の記憶のまま相手を見て最終的には殺してしまったりもするのです。人は、どうして今しか見られないのでしょうか。ごんぎつねの物語からこのようなことが伝えられているような身がします。ごんがどうしていたずらばかりするようになっていたのか、始めからいたずら子だったのか…。ある事柄から現状のみを見てしまう私たちに神さまは、「愛の目をもって人々を見なければいけない、今を見るのではない。私(神)を見なさい。」と語ってくださっています。聖書は「愛」を最大のテーマにしています。今までに話された怒りは悲しみから来ます。悲しみは心の痛みから来ます。だから心が悲しんでいる段階で黙想して神様の御前に出て行く必要があります。そこでは悔い改めが生じます。悔い改めは懺悔ではありません。間違っただ道から正しい道に戻ろうとする行為であり、それは神さまの慰めなのです。これらが何に基づいているのかというところが「愛」なのです。神さまは、私たちの心を知る神ですから、悲しみも喜びも怒りも…すべてをご存知でおられます。そして私たちが愛していることを伝えたいのです。しかし私たちは、一時のことで物事を判断し神さまの存在が分からなくなってしまうのです。こんな心電図のような歩みをする私たちを、神さまは、いつも一定・安定した心をもち、揺るがない土台の上に豊かに高ぶることなく繁栄し、与えるもの・愛を流すものとなり、揺り動かされることなく神の愛を伝えることのできるものとなるように訓練されています。それは神さまが私たちが愛しているからです。ですから、私たちも、勝手に神さまはこういふ人だと判断せずに分り合う信仰をもち、神さまを分かろうとしなければなりません。先ほどのごんぎつねの話と同じです。「だって今まで悪さばかりしてきた。だから今回も…」この「だって…」が私たちに「先」の事どもを思い出す。昔の事どもを考える。見よ。私は新しいことをする(イザヤ 43:18・19)と書いてあります。神さまはいつも新しいことをしようといっているのに私たちは絶えず過去を見て判断し、人を裁いたり、してはいけない決断をしつづたり、逃げ出したり、諦めてしまったりするのです。神さまは常に私たちが愛しておられるのに、過去に神さま以外のものから愛されなかった過去の記憶を元にごんのように愛から離れてはいけません。見る視線を変えなくてはいいけないのです。

①神さまは分かっている!! 神の思いを知る!!

神さまは、私たちのことをすべてご存知です。そのことを知ってください。私たちのことを知っていることを証明するためにイエスさまがお生まれになられたのです。わざわざ人の子として生まれ、この地で生きたのです。だから今度は私たちが神さまの思いを知ろうとしなければいけません。何かが起こった時、決断する前に神さまに祈り「なぜ」と聞き、応えを求めましょう。まずは聞いてください。こんなんの中にあるなら「どうしてですか」と聞いてみてください。時には沈黙があるかもしれません。しかしこれは素晴らしい神さまの応えです。考える時間をくださっているのです。「人は揺れ動くアシのようだ」とバスケルが言いましたが、隣人に支えられながら立っている環境で考える時間が与えられたのです。私たちがやらなければいけないことは、絶えず神さまと隣人のことを感じながら神さまの御前に出ることです。そこで神さまの意図を知ります。「私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされる

のです(Iヨハネ 4:12)私たちが愛し合う中に神さまが存在します。教会は一人では成り立ちません。隣人と向き合えば分かち合うことができます。解決が与えられ、お互いに神さまの愛によって慰めを受けることができます。隣人を通して教会の存在を実感することができるのです。教会がなかったら出逢うことのなかった、性格も個性も何もかもがバラバラでそれぞれ違った者同士の私たちが教会でひとつになっています。それぞれの役割を果たし強くなることができます。(ヘブル 4:15・16、Iペテロ 3:8・9)

②神さまの視線で隣人へ! 過去の記憶で見ない!! コロサイ 3:12～15

私たちは、人の視線で物事を判断しがちです。隣人のことも過去の記憶に基づいて自分のレベルで判断して同情してしまうのです。これは相手を分かろうとして同情しているのではなく、分かっている情報によって同情しているのです。しかし死聖書で神さまの視線で隣人に同情するようにと書かれています。イエス様もそうでした。ラザロの復活の記事があります(Iヨハネ 11:17～44)。人間的に考えれば、同情する相手はマリアやマルタです。しかしイエスさまは死んだラザロに同情して涙を流されました。隣人を神さまの視線で見ると愛を流すためには、過去の記憶に囚われてはいけません。「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。(コロサイ 3:13)」とあるように、物事の判断基準は、神さまと私たちとの関係でしかありません。イエスさまは私たちに「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、私の証人となりなさい。(使徒 1:8)」と言われています。私たちクリスチャンはイエスさまのことを伝える証人なのです。だから過去の記憶で人を愛するのではなく、命懸けで愛して下さった神さまの愛で隣人を愛していきましょう。

③ I understand!! 思いやる。 分かろうとする!!

understandの意味を知っていますか。理解する、分かろうとするという意味ですが、これはイエスさまとった姿です。馬小屋で生まれ最後は十字架の上でした。十字架刑は当時の最も残酷な刑でした。人々が一番悲しくて辛くて耐えられないものを背負って死にまで従われたのです。understand…一番下に立ったのです。神さまの方法はその人(私たち)の一番下に立つことなのです。「分かるよ」と私たちの下から声をかけてくださいます。先ほどのポイントでも話したように人間的に同情するのではなく、この教会の中で元気がない人がいれば元気な人が、understand…神さまの立場で元気づけてあげましょう。それが家族・教会です。同情・思いやりの原語についてですが、『「同情」と訳された「スンパセオー」(συνπαθεω)は、同じ経験を共有することで、同じ感情を持つこと、思いやるという意味。』「思いやる」と訳された「メトリオパセオー」(μετριοπαθεω)は、感情を抑制して傷つけられたり、無礼を被ったりしたときにも、怒りを爆発させないようにすること。感情を和らげること」ということです。思いやるという行為はその人と全く同じ状態になるということを示しています。今まで人間的に同じだった同情とは全然違うはず。今までの同情は「分かちあう」という upperstand だったと思います。しかし聖書は understand 下に立つ姿勢です。私たちの役割は、絶えず隣人のことを分かちあうことで理解してあげて、そしてその人を立たせてあげて神さまのもとへ連れて行ってあげることです。訓練の中で厳しさは伴いますが、愛し合う関係の中でそのような行為は無用です。私たちは、上から視線で「大丈夫よ」「ほら聖書に書いてあるでしょ」と言ってしまうがちです。ヨブの三人の友人もそうでした。言っている言葉は間違っているではありませんが動機が上から視線なことが間違っているのです。だから聖書は隣人と、無条件の愛で同じ経験を共有して、隣人と向き合うことです。愛してゆるとすることは「ゆるしてやった」ではありません。分かるから…ごめんねという姿勢です。私たちは、それぞれ個性も性格も役割も何もかもがすべて違うわけですから、相手の立場にならなければ隣人と分かち合うことはできません。神さまは、わざわざ、それぞれを違うように造られています。だからこそ私たちはその人に対する違うよさの思いを知り、神の思いで見ることが出来るのです。それは、その人の立場になって見て、その人と向き合う時には自分(の人間的な思い)はゼロです。これが愛するということ姿勢です。愛とはすなわち自分ゼロ!ですから、今一度、自分のまた隣人の神様方与えられている役割や目的を理解しましょう。そして、もしも隣人がその道から逸れているようなら、神様の視線 understand 下に立つ姿勢をもって無条件の愛で同じ経験を共有して、隣人と向き合っていくましょう。

(要約者:行司 佳世)

(5月28日)